令和２年度　第３回総合教育会議

日時：令和２年１１月２５日（水）

於　：西宮市役所本庁舎８階

特別会議室

開会　午後２時００分

○事務局　　失礼いたします。それでは、皆様おそろいですので、ただいまから、令和２年度第３回目の総合教育会議を開催いたします。

開会に先立ちまして、会議の出席者に関し、委員の皆様にお伺いをいたします。

運営要綱第５条第３項「会議は、副市長、政策局長、教育次長の出席を求めることができる」との規定に基づき、本会議に、副市長、政策局長、教育次長が出席することについて、構成員である委員の皆様に御異議はありませんでしょうか。

○全委員　　（異議なし）

○事務局　　ありがとうございます。

続きまして、会議の傍聴に関して委員の皆様にお伺いいたします。

地方教育行政法第１条の４第６では、総合教育会議は、公益上の必要があると認められる場合を除き、原則公開と定められております。

本日予定の議題「西宮市教育大綱の改定について」及び「英語・外国語教育について」は、非公開とする公益上の必要が認められないため、本会議を公開することに、御異議はありませんでしょうか。

○全委員　　（異議なし）

○事務局　　それでは、傍聴人の方に入室していただきます。

それでは、総合教育会議を始めさせていただきます。

初めに、市長から御挨拶を申し上げます。

○石井市長　　それでは、本日どうぞよろしくお願いいたします。座って挨拶をさせていただきます。

まず、コロナの拡大が大変心配される中、今日、教育委員会そして教育現場の皆様方には、大変様々な気遣いをいただきながら、日々の教育活動を進めていただいておりますことに感謝を申し上げます。

そして、今日の総合教育会議も開催をちょっと考えたのでありますが、一方でしっかりと対応すればこうした会議というようなものに関しては、リスクは相対的に高くはないというふうに判断をいたしましたもので、このような形で開催をさせていただきました。

そして今日は、大きく２つの議題がございます。先般の教育大綱で、教育委員の皆様方から御意見をいただきまして、それに関し、中での議論を経て、今日、皆様方に願わくば御理解をいただきたいというようなことで、持って参ったものが１つでございます。

それから、２点目につきましては、この外国語教育というようなことであります。これは、こういうコロナの情勢でありはするのでありますが、実は私の思いとしては、時間とタイミングが許せば、この４月の前に皆さんと意見を交わしたいなと思っていた件でもあります。後ほど説明があると思いますが、本年度から小学校における５年生、６年生の教科化ということで、大きな国の方針の変化がある中で、では西宮はどういう方針で子供たちに外国語教育をやるのかということについての現況を共有し、そして皆様方と心合わせをさせていただきながら、今後の方向性について忌憚のない意見交換ができればと思っております。

というようなことでございますので、本日はよろしくお願いします。

それでは、１つ目の議題に入らせていただきます。

まずは、教育大綱の改定ということについてでございます。政策局のほうから説明をお願いいたします。

○政策局　　政策局の安井でございます。私のほうから西宮市教育大綱の改定について、資料を御説明させていただきます。

資料は、ホッチキス止めをやってます３枚ものになります。それと別段でですね、現在の西宮市教育大綱につきましての参考資料として、お手元にお配りさせていただいているところでございます。

１枚めくっていただきまして、前回の総合教育会議でいただきました主な意見でございます。

１つ目、「社会・シチズンシップ」というくくりでは、まず、資料の中の一つ目のぽつから３つ目のぽつまででございますけれども、シチズンシップは「社会をつくる」に関係してくる。この上で、西宮の子供たちへの⑤、社会の一員として、「ルールを守ろう」とあるが、自分でルールをつくったり、つくりかえたりする経験を子供のときからするということが大切という御趣旨の御意見をいただいております。

次に、４つ目のぽつ、２００２年の国連子ども特別総会での子供代表の「全ての子どもにふさわしい社会は、全ての人にふさわしい社会です」というところを目指すべきとの御意見をいただいております。

５つ目のぽつ、子供の権利条約で、４つの基本的な権利があるが、子供が社会をつくっていくことに参加できるような教育を増やすべきだとの御意見をいただいておるところです。

続きまして、２つ目の四角、「現在と未来」では、国連子ども特別総会で子供の代表から、「私たちを“未来”というけれども、私たちは“現在”でもある」という訴えがあった。実際には、子供が現在の社会の大切な構成員として尊重されることを意識付けるものであってほしいという御意見をいただいております。

次に、３つ目の四角、「大人の子供に対する態度」では、今の教育大綱であえて子供を名宛人にして敬意と寛容さを持つべきとあったが、社会の中で守れていない、あるいは不十分や気づいていないということを言語化して、共有するところに意味があるという御意見をいただいておりました。

最後、４つ目の四角、「認知度」については、改定の際には市民の皆さんに知って

いただく取組みが必要という御意見をいただいているところです。

この広報の件につきましては、今後、具体的な方法を検討させていただきたいというふうに考えておるところでございます。

次に、一枚めくっていただきまして、教育大綱改正素案、原案と書かせていただいておりますが、まず左側に前回の総合教育会議でお出ししました案を載せております。右側に前回御意見をいただきました修正を踏まえた修正案を載せております。上側が前文、下側が呼びかけ文というふうになっております。

後、この参考といたしまして、先ほども御説明しましたように現行の大綱のほうも１枚お配りしております。

それでは、修正部分を順番に御説明させていただきます。

まず、前文の一番上の箱の中の一段目でございます。

子供は未来だけでなく、現代社会の大切な構成員ということを踏まえ、１行目真ん中当たり、「夢はぐくむ教育のまち」の理念の下の次にですね、「いまを生き、」を追加しています。また、「次の未来の主役である子供たちが」を、「子供」というふうに改めておりますが、これは特段複数形じゃなくても複数の子供を指していることは分かることから、改めさせていただいたところでございます。

次に、同じ箱の２段目、ここは、教育は学校だけではなく、地域も重要な教育の場という趣旨で書いているところでございますが、ここに「大人は子供に対して愛情と敬意と寛容さをもって接し、慈しむこと」を追加しまして、その他所要の修正を行ったところでございます。

次に、前文の２つ目の箱の１段目、冒頭の主語を「西宮市」から「私たち」に改めております。これは、次の第一から第五までについて、「夢はぐくむ教育のまち」に倣い、結語がなになにのまちであることとしていますので、市民も含めて目指していく方向ということで「私たち」と主語を変えたところでございます。

同じ文の後半部分、これも子供は未来だけではなく現代社会の大切な構成員という

ことを踏まえ、未来の世界の後ろに、「に向かって」を加え、所要の修正を行っております。

次に、呼びかけ文の箱、上が西宮の子供たちへの⑤でございますけれども、自分でルールをつくったりつくりかえたりする経験を子供のときからするということが大切という御意見を踏まえまして、修正前は、「わたしたちの社会のルールを守るとともに、他に対して思いやりを持ちましょう。」ということでございましたが、これを、「私たち一人ひとりが社会をつくることを意識し、社会の一員として行動しましょう。」に改めております。

また、これを対となします、西宮の大人たちへの⑤につきましても、御指摘を踏まえて、「社会の一員として他者に愛情と敬意と寛容さを持ち、子供の模範となる態度を心がけましょう。」を、「社会の一員として、何ができるかを考え、行動し、子供の模範となるよう心がけましょう。」に改めております。

修正箇所は以上になります。なお、御意見の中で「全ての子どもにふさわしい社会は、全ての人にふさわしい社会です」というところを目指すべきというものをいただいておりましたが、改定案の中にこの趣旨を入れようと事務局のほうでも検討してまいりましたが、教育大綱そのものがこのようなシンプルな形を取っておりますので、どうしても教育大綱という範疇を超えて、まちづくり指針のようになってしまうことから、本文中に採用することは見送らせていただいております。

ただし、本大綱は教育子供施策の礎ということをうたっていることから、もう一歩踏み込むべきという御趣旨かと思いますので、教育大綱の解釈や疑義が生じた場合などは、御発言の趣旨も踏まえて対応していきたいというふうに考えているところでございます。

私からは以上でございます。よろしくお願いいたします。

○石井市長　　以上のようにですね、前回からいただいた御意見を受けて、加筆修正というようなことでさせていただいたということでございます。

こちらにつきまして、教育委員の皆様方から御意見、御所見などを順次伺えればと思っております。

では、すみません、山本委員からお願いできますでしょうか。

○山本委員　　はい、前回、シチズンシップのことに対して、「社会をつくる」ということに関係してるという話をさせていただきました。そのことが、新しい素案のほうには意味合いがちゃんと盛り込まれているというふうに思って、整理されているなというふうに思っております。

それから、後の項目もいろいろこの前の意見等を盛り込んで、整理されて提案されているなというふうに感じました。

○石井市長　　はい、ありがとうございます。

続きまして、長岡委員よろしくお願いいたします。

○長岡委員　　はい、前回の委員の方からいただいた、いろんな意見がきちっと反映されているところと、それから特に藤原委員のおっしゃった子供に対する敬意、それから寛容さというようなところが具体に入っているところが、とてもいいなというふうに感じます。ありがとうございました。

○石井市長　　はい、ありがとうございます。

では続きまして、側垣委員お願いいたします。

○側垣委員　　はい、私が発言させていただいた事項、子供代表の演説であるとか、子供の権利条約の趣旨ですね、それを何とかここに入れようということのために、事務局のほうも苦労していただいた跡が見えます。１行目の「いまを生き、未来の主役である子供」、いまを生きる社会の構成員である、というところを、こういった形で入れていただいて良いと思います。

それから、同じく２つ目の箱の「未来の西宮、未来の世界に向かって」、現在の世界も生きているという意味合いで入れていただいたことがいいと思いますし、「一人ひとりが社会をつくることを意識し」ということも大切なことだと思います。参画と

いうか、そういうことにつながっていくものだというふうに思います。

最後は説明にありましたように、「子どもにふさわしい社会は、全ての人にふさわしい社会」、やっぱりこれはもう、基本的に教育大綱含めて施策の中に生きてるものというふうに私の場合、そういうふうになってほしいなというふうに考えております。ここでは入らなかったわけですけれども、その他の場面でも生かしていける考え方だなというふうに思います。その点もまたよろしくお願いしたいと思います。

○石井市長　　はい、ありがとうございます。

では、藤原委員お願いします。

○藤原委員　　はい、藤原です。私、指摘させていただきました、子供に対して愛情だけではなく、敬意と寛容さを持ってという点、追加していただいたこと、ありがとうございます。それと合わせて、呼びかけ文のところの⑤のところ、これは市長がおっしゃっていたシチズンシップという概念をより具体化したものなのかなと、そういう文言であるというふうに理解しており、この内容で必要十分かなというふうに考えます。特に子供に対して、「社会の一員として行動しましょう」という部分なのですけれども、子供に対して敬意と寛容さを持って、つまり、子供を尊重するということは、同時に子供をどういったらいいんでしょう、責任を持たせるというとやや過剰な表現にはなりますけれども、その一員として、子供であっても、やはりそこはきちんと行動しましょうという指針を示すという点で、非常にいい文言だと思います。

以上です。

○石井市長　　はい、ありがとうございます。

それでは、おおむねこういうような形でございますので教育長のほうから修正を加えられたものについての御所見等あればお願いします。

○重松教育長　　今、教育委員さんが言われたみたいな形で、私もその西宮の子供たちへのところが、それぞれで課題が今言われているところに対応するような形で①番から⑦番まで入っていると。それに合わせて、西宮の大人たちへが、子供たちへ対応

するようになっていると。それを見合わせてその上に先ほどあった事柄、子供に対して愛情とか敬意と寛容を持って接しということになってますので、ある意味できちんと統一されたものになっているから、その中で西宮市として市民一人ひとりがという形で１番から５番目があり、そして最後に「夢はぐくむ教育のまち」ということになってますので、全体として、いろんな考え方に対してきちんと対応できるような形で文書ができているのと、それ自体はきちんとした、まとまったものになってますので、教育大綱としては、今、持っているような課題が全て解決するために、これから市民としてとか親として頑張っていかなきゃいけないというふうにきちんと書かれてますので、私としても非常によくできているかなと思っています。

それから、これを先ほどあったように、ぜひ西宮市として教育委員会としてもこれが、要するに西宮市の子供たちを育てるという形のものにしていきたいというふうに思ってますので、よろしくお願いしたいと思います。

○石井市長　　ありがとうございました。

それでしたら、この総合教育会議の中ではですね、この教育大綱について、おおむね御理解いただけたというふうに考えられますので、今後は議会の皆様方に丁寧に説明をし、御意見をいただく。また市民の皆様方にも、しっかりとパブリックコメントなどを通じて、御理解を深めていただきながら、これがさらにフィックスした後には、しっかり市民に様々な形で伝えていくというようなことをもってして、前に進めて参りたいと思います。

では、以上でいいですかね。この教育大綱についてはひとくくりとさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

それでは、２番目の議題「英語・外国語教育について」でございます。

先ほど、冒頭の挨拶で申し上げましたように、今年からはこういう学習指導要領の改訂というようなことで、大きく変化をしていることでございます。一方で、これについて教育委員会のほうでしっかりやっていただけるという認識でありますが、私のほ

うもこういうオープンな場で考えをお伝えをするのが、もしくは副市長などから考え方を聞くというようなものもございませんでした。

一方で今日は１つ目の教育大綱はまとめてみるというのが一つの目的でありましたが、２つ目については、現状を共有し、そして皆さんの意見をいろいろ広く聞きたいというような趣旨でのアジェンダ設定でございまして、そしたら狙いをまずお話をさせていただいた上で、教育委員会のほうから学校の課題について説明をいただきたいと思います。

それでは、よろしくお願いいたします。

○教育委員会　　失礼いたします。

「英語・外国語教育について」の資料を御覧ください。今年度より、小学校の学習指導要領が完全実施となり、３年生、４年生で年間３５時間、週１時間の外国語活動、５年生、６年生で年間７０時間、週２時間の教科としての外国語・英語授業が行われております。

今回の学習指導要領改訂では、大きな変革となっています英語・外国語教育ですが、その経緯といたしましては、平成２５年に文部科学省からの「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」がその端緒として挙げられます。資料１にその計画を示しております。初等中等段階から、グローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図るとされておりまして、英語教育の在り方が示されております。

このときの計画では、小学校の中学年、３年生、４年生で活動型、週１から２コマ程度、高学年、５年生、６年生で教科型、週３コマ程度とされておりました。また、小・中・高を通じて一貫した学習到達目標を設定することをうたわれておりました。

１枚目のレジュメにお戻りください。

この、実施計画に沿う形で、平成２９年度の学習指導要領が告示され、今年度令

和２年に小学校が全面実施、来年度が中学校、再来年より高等学校が全面実施となって参ります。

続きまして、学習指導要領の内容についてですが、大きな特徴であります小学校中学年の外国語活動と高学年外国語科の導入の趣旨につきましては、小学校中学年から外国語活動を導入し、「聞くこと」、「話すこと」を中心とした活動を通じて外国語に慣れ親しみ、外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年からの発達の段階に応じて段階的に文字を「読むこと」、「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うとともに、中学校への接続を図ることを重視することとされております。それぞれ公示の目標につきましては、小学校３年生、４年生の外国語活動の目標は、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成とされ、５年生、６年生になりますと教科となり、目標は、外国語による聞くこと、話すことに加えて、読むこと、書くことが加えられ、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することを目指すことになります。

中学校になりますと、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成、高等学校では、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成、が英語教育の目指すところとなります。

全ての目標に共通するものとして、外国語による言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を育成することが挙げられております。コミュニケーションを図ることが大前提でありますので、自分の思いを伝えたいから英語を話す、英語を書く、相手のことを知りたいから、英語を読む、英語を聞くことが授業の中でも展開されることが求められます。

次に、本市における外国語教育の考え方ですが、国際教育がその土台となっております。

資料２を御覧ください。これは、昨年度、西宮教育推進の方向の国際教育につい

ての図となります。これまで西宮市では、国際教育を通じて自国や地域の伝統・文化に根ざした自己の確立、自らの考えや意見を自ら発信し、行動できる力、異文化や異文化をもつ人を受容し、「つながる」力を持つ子供の育成を目指してまいりました。具体的には、中ほどに位置してあります異文化体験・理解の枠組みにあります、発信型アプローチと受容・共生型アプローチに沿って、教育活動全体を通じた実践をしております。そのベースの上で、英語・外国語教育があります。

１ページ目にお戻りください。本年の西宮教育推進の方向にあります外国語教育の推進のページにはこのように書かれております。「グローバル化の進展により、外国語によるコミュニケーション能力は、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、外国語を用いて互いの考えを伝え合い理解し合うことの重要性は増している。このことを踏まえ、自立した人間として主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造することができるよう、外国語教育の充実を図り、豊かな語学力、コミュニケーション能力、主体性・積極性、異文化理解の精神等を身につけた子供を育成していく。」このような考え方の中で、英語・外国語教育を進めております。

最後に、小学校外国語活動・外国語科への対応のほうを説明させていただきます。

研修につきましては、小学校の今年度からの完全実施に向けまして、４つ目の中黒にありますけれども、ＡＬＴ派遣業者による小学校教諭向けの研修を昨年と一昨年に行っております。２年間で市内の約３分の２の数の小学校の先生が受講しております。

また、小学校外国語担当者会・研修会を例年３回行っております。今年度は、コロナの関係で、４月の第１回は中止といたしましたが、８月の第２回の担当者会と研修では、他のほとんどの研修が中止される中、小学校の英語外国語活動が今年度からの実施ということもあり、大学の先生を迎えて開催をいたしております。

指導体制としましては、学級担任あるいは英語専科教員の指導が行われています。

また、教科担任制を取っている学校もございます。

外国人英語指導助手、ＡＬＴは、全小学校に配置をし、教員の授業、子供たちの学習のサポートをしていただいております。

現場の様子や声といたしましては、今年度はチームス等を使って各校の取組状況の評価等について、特に専科教員を中心に活発に意見交流が行われており、言語活動のアイデア等を日々の授業に取り入れております。

一方で、これまで外国語を教えてこなかった教員や、英語を苦手とする教員、英語によるコミュニケーションに自信がない教員が多く、授業やＡＬＴとの連携について不安を抱えているという声も聞いております。

以上が英語・外国語についての説明となります。

○石井市長　　ありがとうございました。

それでは、資料の３ページ目は教育長がつけていただいたということで、最初に資料についてお話しいただいていいですか。

○重松教育長　　ここの３ページ目の件ですけれども、国語と要するに英語との関係を表しています。一番顕著なのは低学年で、国語のほうは低学年、中学年、高学年、英語のほうも今回は中学年と高学年が入ってますけれども、なぜ低学年が入っていないかというと、結局、帰国子女とかいろんな状況のことで言われたのは、まず母語をしっかり使えなければいけない。母語ができないのに、いきなり小学校１年生から英語というのはいかがなものかというのがありました。ところが、先ほどあったグローバルのことがあって、特に総合的な学習の時間なんかで、ほとんどの学校が英語をやっています。その中で１、２年生も既にその形で英語をやっているので、果たしてそれがいいのかなということがあって、今回はっきりと３年生、４年生、５年生、６年生と授業を持ったという形を国がつくっています。それでいきますと、日本語の習得の過程で、例えば幼児のところからいきますと、大体３歳で言葉がしゃべれるようになるんです。２歳ぐらいからしゃべれるようになって、３歳できちんとした言語体系

ができます、ある程度。それは、なぜかというと、私たち大人もそうですけれども、３歳以前の記憶はほとんどないと思います。それはなぜかというと、言語として頭の中に形ができてないので、記憶としての媒体にならないのですけれども、それが、３歳以後はきちんとした言語体系になるので、思考ができるので、そういうふうな形になるわけです。しかも、幼稚園、保育所では、自分の気持ちを伝えたり、考えを伝えたり、説明をしたりということをやります。それは文字で書いたりじゃなくて、取りあえず話をする。こういうことができる、私はこんなことをしたいんですよとかいうことがはっきりと言える。こんなことをしたら困るよとか、だめだよ、しちゃいけないよとか、そういうことも言えるようになる。それが、小学校に上がって初めてそれを文章で書きます。文字が書けるようになります。ところが、日本語の一番の問題は、平仮名・片仮名・ローマ字・漢字と、そのローマ字のほうは３年生からですけれども、要するに平仮名と片仮名と漢字があるので、それをどういうふうにして自分の言葉として書き表すことができるかというので、先ほど言ったように低学年の１、２年生の間にそれがある程度定着する。特に平仮名がきちんと書けて、文章として書ける。つなぎの言葉、わたしはとか、どこどこへとか、わたしのとか、そういうことを連ねる文章ができるということが非常に大切なんです。それを受けて、今度は３年生、４年生から英語が入ってきますので、今度はその日本語と英語の違いだとか、その後ろの文化的なもの、日本語だったらこう表すのに、違うんだねということが分かるようになるのは５年、６年になってきますので、その意味ではまず、低学年で母語をしっかり身につけておかないといけないということと、それと、それぞれの言葉の関係をそこに図で表したものが３ページのものになります。

先ほど言った、いろんな調査によると、例えば、英語のことですけれども、国家戦略で英語をやっていますけれども、小学校段階で英語を実施する国は１９００年終わりぐらいから、１９９０年代が非常に増えています。アジアでは、１９９６年にタイが必須化してます。それから９７年に韓国も必須化。２００１年に中国が段階的に導

入してます。ヨーロッパでは、それぞれの母語がありますけれども、フランスなんかでも２００２年から英語を必須にしてます。ドイツなんかは、英語とドイツ語がそもそも母語になってますので、プラス新たにもう一つスペイン語を入れているという形でやってます。その意味で言うと、それぞれのところがやっているのでどうしても英語が必要だという形になってきます。

それから、日本の中でもいろいろな調査をしてまして、英語が必要だということで平成１７年の３月から４月に実施した、乳幼児に関する意識調査でも、保護者の７割が小学校段階から英語をやっぱりやってほしいということを言われています。

それから、教員は４０％ぐらいですけれども、学校の校長は５０％以上が積極的にどんどんしてほしい、学校評議員も５３％、それぞれの市の市長さんは５８．２％が実施してほしいということがあります。そういうことを受けて、まあやっていくという形になったのじゃないかなというふうに思っています。

その資料をつけたのはそういう意味で、母語をしっかりとつくって、その上に英語をやる。それで両方の比較をしながら、いろんな言語を習得していくということが非常に大切ではないかというふうに思っています。ですから、書くとかよりも、まずしっかり聞いて、しっかりしゃべって、自分の意見が述べられる形の英語になればいいのかな。それから後は文章を書いたりという形になりますので、それはまあ中学、高校になったときの話かなというふうに思っています。そういうふうな意味で、今までばらばらになっていた英語が、きちんとそういう意味で体系的になったという意味で、次の改訂のときも、そういったものは出てくると思います。ただ、今問題になっているのは、日本語の語彙の力とそれから読解力が弱くなっているというのがあるので、そことの兼ね合いはどうするのかというのが今後の課題になるかなと。今、文部省のほうも次の強化点を目指して改訂をしてますので、その中で、語彙力と読解力をどうするかというのは課題として挙がってきてます。ですから、この英語等を取り入れながら、日本語との関係をどうするかという。特に日本語は、ほかの言葉としてより非

常に難しいので、それをどうするかという意味で、今後大きな課題かなというふうなことを思ってこの資料をつけさせていただきました。

以上です。

○石井市長　　ありがとうございました。

教育委員の皆様方から、質問なり御意見なりいただければと思っておるのですが、ちょっとその前に佐々木次長、英語でもありますのですね、今、木田さんのほうから、教育委員会のほうから、経験を持っていない教師などから、不安の声も漏れ聞こえるというようなこととかございました。なかなか教育委員会のそちらの立場からなので、言いにくい部分として、現場の実情とか、今の課題など、そういうことも含めてまた教育長の話の補足も含めて、お考えのほう披瀝いただければと思います。

○佐々木次長　　それでは、ちょうど英語というのではなくて、外国語活動が小学校段階に入ってきたときに、外国語活動担当者会というのをまず打ち出しました。そのときに、たまたま私がまだ英語の指導主事をやっていた頃でしたので、そのときに現場の先生方にお願いをしたのは、学校の先生というのは本当にくそ真面目な部分がありまして、授業をするとなると教えなきゃいけないというふうに考えてしまうんですね。でも、外国語というのはそうじゃなくて、一緒に学ぶという姿勢で外国語にアプローチしてもらえませんか、という話を私のほうからはさせていただいたんです。ここで小学校の先生がすべきことというのは、誰かに教えることを預けて、それを眺めていることではなくて、自分も一人の学習者として授業の中に加わっていく。そして、言語を学ぶモデルを子供たちに見せること。こうやって言語って学んでいくんだよということを、モデル的に子供たちに示していくことも先生方の大切な役割の一つなんですよ、ということをお話させていただきました。だから、外国語は導入されると同時に、教師の役割というものをもう一度授業の中で見直していく必要があるんじゃないですか、というような話をさせていただいたのがやっぱりスタートです。

現状は、ＡＬＴにつきましても、非常に手前みそですけれども、質の高いＡＬＴを

正直担保できているというふうに思っています。これはもう西宮市が、全面的にバックアップしていただいているおかげで、そういうことが可能になっています。ほぼほぼ授業時数の半分程度、ＡＬＴが一緒になって授業をやってくれていますけれども、私たちが思うのは、ＡＬＴに授業を丸投げするのではなくて、子供たちと一緒にＡＬＴも交えて外国語あるいは英語を学んでいくという、そういうものを実現できるようにしていきたいなというふうに思っているところです。だから、現場の先生方はもちろん、今現在お勤めの先生方の中でも、まだまだ大半が自分が英語を教えるなんて思わずに小学校の先生になられた方が多いですので、今から先はそのことは覚悟しながら教師になっていただかなければいけないのですけれども、そういった意味で行政的にサポートできるところは、できる限りサポートしていきたいなというふうに思っているところでございます。

以上です。

○石井市長　　ありがとうございました。

それでは、ちょっとここまでいろいろ御意見をいただいた中ですが、それでしたらちょっと山本委員から順次、質問、課題の御指摘などを含めて、どうぞ御自由に御発言いただければと思います。

○山本委員　　それでは、今、佐々木次長がすばらしい話をされたので、言語を学ぶモデルとしての教師というのは、すごくこれからの教師のありようとして、できないことだけが悪いのではなくて、一緒につくりましょうと、まさにひとつのこれからの在り方の話を以前にされていたんだなということで改めていいお話だったなというふうに思いました。

二つ言います。一つは、もう当然ですが、この時期ですので、外国語は必要か必要でないかということを論じる時期ではなくて、じゃあどれだけあるのか、どう効果的にするのかとか、そういう質とかを問う時期に来ているなと。それで、ちょっとマイナスなことを話すのですが、結局現場の負担感という、このことは正直言うとそのこ

とというのも、別に先生方をカバーするわけではないですけれども、やっぱりある面ではあって、今回の学習指導要領では、時間数が小学校ですけど増えました。それから、プログラム教育ですとか道徳が教科になったりですとか、英語が教科になったり、新しいことがたくさん出てきたんですね。じゃ、そういうことも踏まえながらの現場があって、そうするとそこを要するに、少しでもプラス面にということを考えてみると、一つは私は今やろうとしているＧＩＧＡスクールですとかＩＣＴとかね、この辺のことを活用して、英語が効果的に進むようなことをぜひとも探るということが、どっちにとってもプラスじゃないかな。教師にとっても、これ使ったらこんな効果があるんだという実感ができるし、行政からもこれだけのことをしたらこういう効果があったとか、それを別個にしないで、一つにして考えることが大切だなということが一つ考えていることです。

後一つは、西宮市は国際理解をずっと全国でもかなり早い時期からしてきた学校で、当然なんですけれども、国際理解と外国語教育、イコールではない。当然、広い範囲で国際理解というのがあるわけで、ですから、短絡的に英語が話すとか書けるということに特化しないで、それも大切なのだけれども、根底の異文化理解というか文化とかをお互いの国の文化を理解するということも、一方ではすごく大切にする必要があると。文化理解というのは、仲よくしましょうねじゃなくて、まず、文化理解ってむちゃくちゃ難しいですけれどもね、それでもしていかなあかんですよねという、こういうところからすることもすごく大切なことで、社会を中心にしてましたので、そういうことをとりわけ感じます。どっちかと言うと、仲よくしましょうとかということを簡単に言っちゃうんだけれども、実はそうじゃないでしょ。そういうことなんかを認識しながら進めることも大切なことかなというふうに考えています。

以上です。

○石井市長　　ありがとうございました。

それでは、長岡委員お願いします。

○長岡委員　　私も佐々木次長の話でちょっと考えたんですけれども、英語を学ぶということは、ちょっと英語とは違うのですけれども、これまでの日本語、母語とか母語文化の在り方ですけれども、距離を持って先生が考えることができるんじゃないかなというような、少し距離を取って母語文化についても考える、そういった可能性も出てくるのかなというふうに、生徒と子供たちと一緒に学ぶ姿勢を、モデルをつくってほしいというところでね、ちょっとそんな気がしました。

それから、英語の話に戻すとですね、英語を学習するということは、単にもう一つの言語の能力が身につくということ以外に、山本先生がおっしゃいましたけれども、異文化をより複雑な視点から見る力が出てくるのかなという。まあ複眼的に文化を見ていくような力、こういうものも育つんじゃないかなというふうに思います。複雑な視点から見る力というのは、異文化とか自分の日本の文化を見る際も複眼的な思考力とか、それから批判的な思考力も、仲よくだけじゃないよというような言葉でおっしゃいましたけれども、批判的な思考力というのもそういうようなところから身についていくのではないかなというふうに感じています。

○石井市長　　はい、ありがとうございます。

では、側垣さんお願いいたします。

○側垣委員　　今、英語の教育ということで、私たちの世代にも英語教育があって、ただそれは何て言うのかな、学校で勉強するものだと、日常生活とはかけ離れた、かけ離れたではなかったですけれど、オリンピックや万博が控えみたいなところで国際的なものとしてあったのですが、教育の中ではそういう視点が余りなかったんですね。自分自身の経験から言うと、実は３歳ぐらいの記憶なのですが、甲子園に米軍キャンプがありまして、そこの兵隊がうちによく遊びに来てたんですね、施設ボランティアとしてなんか毎週のように来てて、その人たちは多分英語をしゃべってたと思うんですね。そういうことに触れて、抱っこしてもらったり、何だか訳も分からないのに語りかけてもらえたりみたいな、日本語じゃないなという意識はあったのですけれども、

そういう記憶から、同じ言葉なんだという意識というか、そういうものが小さいときに生まれて、そして外国人と接することに余り抵抗を感じないとか、いろんな意味で何とかなるさみたいなところで今まで来ているんです。

私の息子、娘もスポーケンの交換留学に２人行かせていただきましたし、そのときにホストファミリーとして、向こうの高校生を１カ月ずつお預かりしましたけれども、大して不自由も感じなかったという。やっぱりそこの大切なのは、感じる力というか、あるいはコミュニケーション。どういう方法でコミュニケーションを取るかというところで子供たちのその意識が育ってくるのかなと。ちょっと長くなって申し訳ないのですけれども、英語ではないのですけれども、うちの施設の中高生ですね、毎年韓国に連れていって、向こうからも来るのですけれども、交流を二十数年間しているのですが、今年は残念ながら中止になりました。最初の頃は、韓国語が通じなかったらどうしようということで、お互いに通訳を用意してたんですね。こっちも用意するし向こうも。それが、そうですね、１０年近く前ぐらいからかな、もう必要なくなっているんですね。一つはスマートフォンです。スマートフォンのその翻訳機能が、私たちよりも子供のほうがよくうまく使いこなして、勝手にやっているんですよ。そういうところで、幾らでもコミュニケーションができるというこの社会になってますので、そういうことも活用する。先ほど山本委員がおっしゃいましたけれども、ＧＩＧＡスクールでですね、ＩＣＴとかそういうものを利用するという能力は子供たちのほうが高いと思います。そうやってやっぱり有機的に連動させてやるということ。

それから、もう一つは、皆様おっしゃっていますけれども、異文化の理解ということは私も同感なんですね。その英語に限らず、英語を学ぶことを通じて異文化の理解を進めるということは一つのきっかけかなと。英語の教科書の選定のときに、委員の中で、どの教科書を見るかというときに、イラストが書く順ばかりでなくて、いろんな国の人種が、どれだけたくさんの人種がそこに並んでいるかなみたいなのも一つのポイントだよねという、そんな話もしたことがありますけれども、世界中にはいろん

な人たちがいて、その文化を理解していくことの一つのきっかけにしていくということが大切かなと、そういうふうに思っています。

○石井市長　　続きまして、藤原委員お願いいたします。

○藤原委員　　藤原です。今回のテーマは外国語教育というものがどうなのかという点で、すごくばくっとしたテーマなのですけれども、教科という側面で見たときに、他の教科、国語であり、算数であり、音楽であり、社会であり、と英語が決定的に異なるのは、他の教科というのはそれ自体が一つの学問として目的たり得るんだと思うんです。それに対して英語はですね、英語の先生である佐々木次長に怒られるかもしれませんけれども、英語は目的じゃなくて手段に過ぎない、あくまでコミュニケーションのツールに過ぎないんだということがあるんだと思います。だから、英語そのものを目的としてはいけないと。といいますのは、全国の教育委員研修で、よその自治体、ちょっとどことは申し上げられませんが、うちは英語教育には本当に力を入れております、子供全員英語をしゃべれるようにします、ということを一生懸命アピールされているところがあったのですけれども、まあ正直私は若干滑稽に聞こえました。私立の中学、高校とかでも、英語教育をすごく熱心にアピールされるところがありますけれども、それって手段に過ぎないんじゃないのというふうに、ある意味冷めた目でみるところがあります。さらに、後１０年もしたら、もしかしたら先ほどの側垣先生のスマホの話じゃないですけれども、スマホをこの辺にあてたら、日本語をしゃべったらそのまま英語が出てくる時代がそのうちやってくるんだろうなと思います。となると、果たして教育自体が必要だろうかという疑問すら湧いてくるところではあります。ただ、その英語教育自体というのは、あくまで手段なんだと。ということはどういうことかと言うと、目的を見失わない、何のために英語をやるのかというところの目的を見失わないことが、今後の外国語教育というものに大切になってくるんだろうと思います。具体的には、既に出たところではありますが、異文化理解というところは大きいと思います。異文化理解というと、非常に大きく振りかぶったような言い

方になりますけれども、それよりは、他者を知ることによってその人に対する、どういったらいいんでしょう、憎しまないといいますか。ヘイトスピーチなんかやってしまう人というのは、単に知らないからやっているわけで、相手が同じ人間であり何を考えているのかというのをコミュニケーションが取れたらそれはしないわけです。そんな子供、大人には、少なくとも西宮の子供たちにはなってほしくないというところもありますし、あるいは英語を使って世界中から情報を収集する。あるいは、自分たちとはまた異なる多様な人種や文化があること、その存在を知るといった目的を大切にした上で、手段たる英語を学ぶというところにすべきなんじゃないかなと考えます。

以上です。

○石井市長　　はい、ありがとうございました。

それでは、これはいろんな意見がおありですので、次、坂田さんに、そしてぐるっと副市長のほうに回って、そして教育次長としての意見であってもそうでなくても結構でありますから、要はフリーに皆さんの考えを出していただくということです。

よろしくお願いいたします。

○坂田次長　　それでは、私も感想ということでしかありません。専門家でもありませんので、ただ私自身、中学から英語を教科書で学び、日本人の先生にやってもらう英語の授業で、日本語の英語を聞きながら勉強していって、結果的に受験英語まで行き、いわゆる今のお話で言う、まさに英語というものそのものが目的になっちゃって、その先に全然進めなかった、会話もできないという形になってしまった者からしますと、こういう形で今回の新たなその中学年という、まず書いたり読んだりということではなくて、まず聞いて話す。つまり、耳から入って、口でということから入っていくというふうな形の中で、英語に関わっていくということに対して、すごく羨ましいなと思います。物すごく、期待するものがあります。そういう形で、もちろんさっきの母語の話として、日本語を我々が覚えるものと、この英語を覚える形というのは関係は違うのでしょうけれども、我々自身日本語は当然ながら読み書きから入ったわけ

ではなく、聞く中で最初は家族のママ、パパということから入って、結果的にこういう日本語という世界でも特に難しい言葉をいつの間にか自分のものにしてしまっているわけですから、恐らく英語もそういう形になって、そういう形の入り方になれば、もっともっといろんなものが広がっていって、結果的にそういう形で語学が目的でない英語ということを学ぶことができていけば、それがそこから入ってくる。ここで皆さんが先ほどからおっしゃっている、いわゆる言語を学ぶだけではなくて、いわゆる異文化に対する視点とかということも養われてくるんじゃないかなと、そういうことも含めてすごく期待するものがありますので、本当にこれからのことを子供たちは羨ましいなと思っています。

以上です。

○石井市長　　はい、では北田副市長どうぞ。

○北田副市長　　はい、この外国語教育というのを話すのは、私は一番ふさわしくない人間じゃないかと思っているのですけれども、といいますのは、学校の単位の中で一番英語が嫌いでございまして、最も成績が悪かった一人でありますので、坂田さん以上に私は英語教育の劣等生というふうに自負しているところなのですけれども、そういう劣等生から見た英語、あるいは外国語教育というところで感想を述べさせていただきますので、参考になるかどうか分かりませんけれども聞いていただきたいと思うのですけれども、中学校から始めた英語を中・高・大と、まあ１０年間ぐらいですかね、やってきたわけですけれども、まさに環境が一つの英語教育として、コミュニケーションツール、特に会話ということについて余り重視されてなかった時代の教育を受けてきたわけなんですね。それで結果的に、もっと英語を勉強してたらよかったなと思ったときは、大学に行って例えば技術論文の英語論文を読むみたいな話のときに、もうちょっと勉強したらよかったなぐらいのことを思ったわけですよね。やっぱりそのときでも会話で不自由は特にしなかった。なぜかというと、英会話をふだんする機会というのがほとんど自分の生活圏の中にいると、ほとんど皆無であった状態が

ずっと続いてきて、それは実は今でもそうなんですね。役所の中でも特に地方公務員ですから、特に技術系の仕事をしている上で、もちろんいろんな参考論文を読むときもありますけれども、英会話が主体的に自分の生活にどう関わってくるかという話になると、特にビジネス、自分の仕事の中でもほとんど使う機会がない。だから、英語からある意味避けて通ってても何とか生活できていると、こういうことをやってきたのが実態だと思います。それを、逆の目で見てみると、小学校・中学校の生徒さんたちに、どういう機会に英語を使う機会があるのか、どういうぐらいのそれは重要性を帯びているのかというのが、多少なりともっと小さいときに理解できていたら、もう少し英語に対するモチベーションが湧いたのかなという気がするんですね。こんなときに使うのに英語が使えたら便利だなとか役に立つなとかいうのが分かれば、もうちょっと気合いを入れて勉強したかもしれません。

それともう一つ思いましたのは、これはよく言われる話だと思うのですけれども、英語でしゃべるときに、自分の母国のことをしゃべれ、あるいは自分のまちのことをしゃべれと言われたときに、しゃべれるネタがないというのが、語学ができても知識がないとしゃべれない、会話できるネタができない、というのはよく言われる話だと思うのですけれども、先ほどの長岡委員が言われたことにかなり近いところなのですけれども、外国語を勉強するということは、もちろん相手の外国のことをその文化をより理解しなければならない。当たり前のことなんですけれども、その手前に自分の日本の国のこと、あるいは自分の地域のこと、自分の住んでるまちのことをよくよく理解してないとしゃべれないということからすると、ある意味、その外国語を勉強することは自分のまちだったり国だったりをもう一遍見直すことにつながるんだろうなというふうに勝手に思ってますので、テクニカルなことは私、全く分かりません。外国語の教育のテクニカルなことは分かりませんけれども、そういう、どういう場面で使ったらええんかということがモチベーションになる。そして、勉強した結果が単に教養とかそういうものじゃなくて、自分の生活、自分のまち、自分の地域をよくよく

知り得るツールになる。こういうことは非常に大事なことだなと思いますので、ぜひ教育委員会の皆さんには、そういう生徒もいたんだと、いるんだということを思い出していただいて教育していただければ大変幸いでございます。

以上です。

○石井市長　　どうぞ、田村副市長。

○田村副市長　　今の北田副市長の話を聞いてですね。二人とも英語ができないというのはまずいなとは思ってはいたんですけれども、実際私も英語は全然だめでして、英語から距離を置いた選択をした適例がここに座っている状況です。

正直、なんでそうなったのかなというのを考えたときに、もともと田舎出身ですので、英語に触れたのってやっぱり中学校に上がって教科として、教科書みたいなのが初めてだという、そういう状況で英語をスタートさせているので、まあまあ今から考えると結局受験科目としての英語しか考えてこなかったと。まあどっちかと言うと語学というかコミュニケーションツールという意識って余りなかったんやろうなあと、どうやって点を取るか、そういう意識しかないので、どこまで行ってもまあ身につかないのは仕方がなかったのかなと、自分の力不足を棚に上げてはいるのですけれども、そう考えてましてですね、多分、自分の子供にはそうはあってはいかんと思って、小さい頃から英語を習わせてみたのですけれども、これがまた身についてなくてですね、非常に英語を教えるって難しいというかどういうことなのかなというのが、私自身はちょっとなかなか答えがない状況ですので、手探りの中で教育委員会の皆さんにはぜひとも、西宮の子供たちには身につく教育をよろしくお願いしたいと思っています。

以上です。

○石井市長　　はい、政策局長お願いします。

○政策局長　　私も専門家ではありませんので、ちょっと感想のほうからお話をさせていただきます。

私もやっぱり中学校で初めて英語に触れて、それでまあ高校、大学と十何年やって

きているのに全く身についてないという一人でございます。

やっぱり今、小さい頃から英語を学んでいる方で、本当に身についている方は、一々頭の中で日本語に訳して考えなくても、英語がそのままストレートに解釈できて、そのまま英語で返せるというような、本当に生きた英語が身についているというのがすごい羨ましいなと思うところです。そういった感覚を研ぎ澄ますのには、やはり小さい頃から英語教育を受けるというのが大事なんやなというふうに思うところです。

それと、異文化理解の話で言いますと、教育長のほうから西宮の英語教育はグローバル人材の素地を養う国際教育が目的やというようなお話がありました。まさにそうだろうなというふうに思うところです。特に、やはり外国人の方というのは西宮市内でも増えてまして、今は７，０００人から８，０００の方は外国人がいらっしゃると思うのですけれども、そういうこともありますし、また自分のほうから外国に出て、旅行ももちろんそうですけれども、仕事をする方もどんどん増えていくということで、やはり小さい頃から国際理解というのが必要になってくるかなというふうに思います。そういう意味では、教育を通じて、例えば挨拶の仕方であるとか、生活様式であるとか、そういう自分の国とは違う文化を受け入れるというのは、そういう下地がつくれるということは、非常に重要やなというふうに思います。そういうふうにすることで、多様性を受け入れるというか、いろんな国の人がいろんなことを考えて生きてはるんやなということが分かるということ、異文化に寛容になるというようなこと、そういうことが無意識で身につくというところが重要なのかなというふうには思います。

先生方も慣れない英語を教えないといけないと、特に小学校の先生はそうだと思いますけれども、御苦労が多分多いかと思いますけれども、西宮の子供たちのためによろしくお願いいたします。

以上です。

○石井市長　　はい、ありがとうございました。

副市長二人がこうでも私が英語をしゃべりますから。それをしっかりまずお話をし

た上でですね、ちょっとこの英語の目的というところで先ほど教委からもお話がありましたけれども、藤原委員のほうからありましたですね。これもちろんその受験のためのものが目的ではないということであります。

次長、英語教育の目的ということをどういうふうに理解をし、西宮ではやっているかということについて、改めてちょっと確認でお聞かせいただければと思います。

○佐々木次長　　まず英語を学んで何をもって身についているというか、ということを考えたときに、皆さんはどうお考えになるのかなというふうに思ったんですよ。何をもって英語が身についたというふうに感じるか。これ正直に申し上げて、世界中探して日本人ほど英単語を知っている国民って、私はいないと思うんです。語彙力に関しては。だから、それだけ大学入試に費やす語彙というのは、すごい量です。なのに、しゃべれないのはなぜかというと、それはしゃべらないからなんですよね。だから、語彙はどの国の人たちよりも豊富に持っているはずです。ただ、その豊富にある語彙があるにもかかわらずしゃべれないのは、しゃべる環境がないからです。面白い学者が世の中にはいてまして、言語距離というのを測った学者がいまして、英語を左の極として右の極までどれぐらいの言語が並んでいるか。英語に一番近い距離にいるのがオランダ語らしいです。その後いろいろ、フランス語とかドイツ語とか、フランス語なんていうのは、英語がケルト語と、ノルマン語からできあがったところですから、もともとフランス語が流入してますので、一緒で当たり前なんですよね、段階的には。そういう言葉がずっと並んでいて、ちょうど中央ぐらいに位置するのが中国語らしいです。ごめんなさい、韓国語らしいです。もう少し英語よりが中国語、ほんで一番右端にあるのが、もうお察しのとおり日本語なんですよ。だから、様々な文法的なこととか語彙のこととか、そういったものをずっと並べていくと、日本語と英語というのは一番距離が遠い言語らしいです。にもかかわらず、日本では英語を話さずに物が買えます。日常生活、何でも事足ります。コンビニで英語がしゃべれないから物が買えなかったら皆困ると思います。でも、日本語だけで全部通じる世界なんです。だから

そういう中で英語を話せるようにしていこうと思ったら、それこそ必要がなかったらしゃべれるようにはならないです。私の非常に無謀な一人の意見として聞いてもらったらいいですけれども、そこまで英語をしゃべれるようにしたいんだったら、国家戦略として大学の授業を全部英語でやったらええねんと正直思います。それぐらいしないと、英語がしゃべれるようには絶対にならないだろうというふうに思ってます。

今、いろんな方のお話を聞かせていただいてて、やっぱり異文化、じゃあ西宮は何に軸足を置いて英語教育をやっていくんやと言われたら、先ほどお示しした、やっぱり国際教育、グローバル人材の素地を養う国際教育、これが一番根本になっていると思います。もっと言えば、先ほど教育長や山本委員からのお話もありましたけれども、西宮は早くから帰国子女教育を昭和５４年から始めて、そこから国際教育にずっと綿々とつながってきている部分があります。そういう歴史を踏んできた西宮市でございますので、もうその帰国子女教育においてでも異文化を理解する、異文化を受け入れるということを昭和の時代から帰国子女を通して違いを感得し、感じて会得しですね、その違いを相互に尊重しあい、一緒に生きていく人間を育てるというようなことを項目として挙げて、帰国子女教育というふうにしてるんですね。だから、そういうところが一つの大きな軸足になるところかなというふうに考えているところです。

だから、正直なところ私も言語に関しては人並み以上に勉強はしてきましたけれども、英語を会得する、言語を会得するのにどれぐらいの時間が必要か、そして会得したとしても、それを維持するためにどれだけの環境が必要かということを考えたときに、日本で生活をしながら英語の言語を保持し続けるには、これはよっぽどの自身の努力がなかったらだめですし、私が大学院時代に学んだ先生の御自宅は、母親が日本人、父親がアメリカ人、３歳の子がパパ言語とママ言語を見事に使い分けます。それは、ずっとその子にとったらその環境が維持されていくわけなんです。でも、そういう環境でもない限り、環境を維持することは不可能です。だとするならば、先ほど申し上げたように、文化の面での国際理解とかの中で、文化に対する理解を深めること

と同時に、もう一つあるとすれば外国語に対するフィルターを下げる。これは、側垣委員がおっしゃられたことが見事に的を射たお答えになるというふうに思うのですけれども、やっぱり接することによって異なった言語を話される方のコミュニケーションに対するフィルターを下げる、これをしていくことは非常に意義のあることだというふうに思いますし、できる限りそれは早い年齢からやったほうがフィルターが下がるだろうというふうなことが考えられます。

それと、異文化理解に関しては、私は長岡委員のおっしゃられたクリティカルシンキングという批判的思考ですよね。これが非常に大切だというふうに思ってて、私は自分自身の一番の弱点は、クリティカルシンキングというのが弱いというのが自分の弱点だと思っているのですけれども、ディベートという文化が、なぜ英語圏で成り立つのか。これ日本が発祥の文化ではないですよね。英語圏が発祥の文化ですよね。なぜかというと、今回はそうはならないようですけれども、アメリカの大統領選でお互いあれだけ激しく罵り合っておきながら、選挙結果が出たらにこっと笑って握手をして、お互いをたたえ合うというようなことができるんです。あの人たちにとっては、言語はゲームの一つであるわけなんですね。だから、言語で平行線をたどっても、最後は握手をして別れることができる。これ、一つの文化だというふうに考えるべきだというふうに思うんですよ。だからそういうふうなことが、世界中探しても議論してコンセンサスを得るというような、おめでたい考え方を持っているのは日本人ぐらいやというふうにも言われたこともあるのですけれども、やっぱり議論は議論、人は人というような、分けて考えるような文化というものも、どこかで習っていかなければいけないんだろうなというふうに思いながら、いろいろお話を聞かせていただいておりました。

すみません、ちょっと聞く話聞く話、本当になるほどなるほどと思う話が多かったので長い時間をいただいてしまったのですけれども、西宮は先ほど申し上げたように、西宮で英語を学んだからペラペラしゃべれるようになるような、先ほど言ってました

自治体のようなことを私は言うつもりは全くございません。それよりもむしろ、西宮で学ぶことによって、外国人、異文化を持った人たちとの間のフィルターは下がるし、そのような中で子供たちが一つのツールとしての言語に興味を持って、学んでいけるようなきっかけづくりをお手伝いさせていただきますというぐらいのことかなというふうに思います。

すみません、長時間話して申し訳ございません。

○石井市長　　ありがとうございました。

皆さんの意見を聞いていてですね、今日は実は私の考えをまとめて参りました。そういう中で、本当に皆さんの意見とですね、私がここに今から申し上げますが５つのポイントが共有をしていたので、すごいなと思ったところであります。そういう意味では、ちょっとまた、まとめにかえってもちろん、また御意見等あれば聞かせていただければと思います。

私が、西宮のこの今始まったばかりの小学校の英語教育等々について、期待したいところでありますが、１つ目は学ぶ目的の共有ということでもあります。先ほどからございました、教科化されたことで、しかし週に２回で英語がペラペラにしゃべれるはずはございません。まあ一方でそれが一つのきっかけづくり、動機付け、異文化理解、それからのクリティカルシンキングというようなことがございましたけれども、こうした単に言語ということだけじゃなくて、まさに文化を学ぶきっかけになっていくというようなことで、そうしたことを西宮市として学ぶ目的、これをしっかりと共有をしていきたいなと思っております。

２つ目がですね、そうした中でこれは大人から子供たちへ、夢をリアリティーあるものとして子供に見せてもらいたいなというところであります。つまり、今は小学校３年生、４年生でいきなり英語といっても、なかなか臨場感湧かないと思いますけれども、そしてなかなかペラペラに公教育でなるのは不可能だとは言いましたが、一方で西宮では、中学生の段階から今年はだめだったですがスポーケンに行くような機会

もチャンスとしては市西等々に行けば、留学をできるというようなチャンスもあると。つまり、何らかのきっかけで海外に目を向けた児童・生徒が、そのチャンスを西宮の公教育の中でもつかめるきっかけがあるんだよというようなことを、西宮はこういう環境を提供しているんだよ、こういうパイプがあるんだよというようなことも、ぜひ示していってもらえればと思います。

合わせてですね、海外へ行っての様々な経験をした人というのは、いろんな意味で人生の経験値を積んで、いい経験、悪い経験含めてしていると思います。そういう経験、例えば海外青年協力派遣隊員の人たちがこういう経験を異文化でしたとか、様々な海外との語学留学をした人がこういうような思いで現地に乗り込んで行ったとか、そういうお話を聞く機会を今も多くつくっていただいていると思いますが、そうしたことから自分も語学という、こういうものを学ぼうというきっかけになると思います。そうした機会というものの提供は、ぜひより意識をしてもらえればと思います。

それに合わせて３点目が、このコミュニティスクールの文脈と私はどうしても絡めたいなと思うのですが、地域のリソースですね。西宮であれば、大変海外と縁のあった方、ある方というのは地域におられると思います。そういう中で、欧米だけでなくて、発展途上国とかでも、いろいろな御経験をされた方が子供たちに刺激のある話というものをする機会というのがたくさんあると思いますので、いろんな文脈で地域にも目を向けながらやっていただければなと思っております。

それから最後２点ですが、最初の教育委員会からもお話がありましたけれども、教育現場の現状が大変、小学校の先生方に負担がいっているというようなことに対して、やっぱりどうしても心配がございますので、その辺り、小中連携などのやり方もあるでしょうし、英語の専科を小学校に配置していただいてるところもありますでしょうし、適切かつ過度にならない負担の範囲で研修をしっかり講じていただいて、そして教育現場が混乱しないようにお願いをしたいと思います。

最後に、これも委員の皆様方からございましたが、ＩＣＴの活用がＧＩＧＡスクー

ル構想によって進められておりますが、先ほども文科省のホームページを見て参りましたけれども、外国語教育とＩＣＴの親和性は非常に高いというのを一番最初の一文字で書いてあります。これはもういろんな文脈でですね。グッドプラクティスが、日本中に様々転がっております。そういう意味では意欲的に取り組む先生だけでなく、こんなやり方あるよ、あんなやり方あるよというようなものが教育委員会のほうで、願わくば現場のサポート、ＩＣＴというものをよりうまく使ってやっていただくことを心がけていただければなと思っております。

５つ用意したことが、皆様方のまとめになって、本当によかったなと思うばかりでありますが、ここまでのところで皆さん一巡したわけですが、御質問なり追加での御意見なりあれば、お聞かせいただければと思いますがいかがでしょうか。

はい、側垣さん。

○側垣委員　　細かい細かい質問なのですけれども。

○石井市長　　どうぞ。

○側垣委員　　教育現場で、今、実際に小学校などでされていると思うんですが、私も何年か前に南甲子園小学校に見学に行かせていただいたというより参加させていただいて、もうすごいいいな、羨ましいなと、ネイティブのね、先生たちともお話をしていて楽しそうにやっている。ただ、今現状、コロナでマスクをしながら授業ですか。先生方は口元が見えないし、発音が正確にできない。今、何かそんな対策しているんですか。すごい大切だなと思ってるんです。口元が見える、見えないというのが。

○石井市長　　ちょっとこれは教育委員会のほうから。

ちなみに私は、この前、南甲子園小学校へ行ったら、英語専科の先生がマスクでなくシールドのやつをつけてたので、側垣さんの意識されていることを意識してなのかなと思っておりますが、じゃあはい、公式には。

○教育委員会　　すみません、マスクはやっぱりというふうなところはありますし、委員がおっしゃられるように口元が非常に大切ですので、結構例えば、「ザッ」と言

ってから、こういうふうにして言葉を発さずに言ったものをマスク外して口元だけ見せると、そのようなことをされているということは聞きました。

○石井市長　　これも、グッドプラクティスなのか、知恵なのか分かりませんが、そういうところで現場は慣れないところを含めて奮闘していただいているというところであろうと思います。

○側垣委員　　施設の子供たちが学校へ通っているが、うちの職員が、彼らはめちゃくちゃ発音がいいよと。ネイティブみたいな発音をするんだと感心しておりましたけれども。

○石井市長　　彼らとはどこかの教師ですか。

○側垣委員　　いえ、子供たちが。

○石井市長　　子供たちですか。

○側垣委員　　きちっと学んでるみたいで。

○石井市長　　はい、ありがとうございました。

　ほかには、よろしいですか。

　今日はちょっとこういう大きな目標を共有できればと思ったところでありますが、いいですか。

　はい、藤原さん。

○藤原委員　　はい、藤原です。市長の御指摘の５点目のＩＣＴの活用という点、これは確かに外国語を学ぶに当たって、ＩＣＴというのは非常に有用だと思いますし、それこそツールは山のように転がっているということだと思います。とりあえず、タブレットを配るわけですけれども、タブレットを配ってじゃあ何をするのかというのが、恐らく配ることが先立っている状況だと思うんですね。配り終わってどんどん使っていこうというふうなところだと思います。そうした中で、必ず先生方、もしかしたら子供かもしれない、すごく上手な使い方をされる人というのが必ず出てくると思うんです。それをいち早く全体で共有して、言い方悪いですけれど徹底的にパクるわ

けです。そのやり方をほかの子とか先生方が。というふうな情報共有のシステムというか、中ではつくりたいなと思っております。これは、英語だけじゃなくて、ほかの教科に関してのそのタブレットの活用というところでも生きてくるかなと考えております。

○石井市長　　ぜひ、よろしくお願いします。コメントを。

○教育委員会　　すみません、端末が今、配られているというふうなところで、いろんな授業だけじゃないところでの使われ方等々があると思いますので、それにつきましても、今、知りうる限りですね、情報を集めて実践事例ということでお出しをしています。今のところですけれども、各校長会のときに二、三出して、そして学校のほうに共有してくださいということで、全先生が見られるところに置くというふうな感じで、今はまだ１２ぐらいですけれども、そのようなところで、こちらのほうとしてもいろんな情報を知って、そして収集して発信してというふうなことを考えております。

○石井市長　　ほかにございますでしょうか。よろしいですか。

　それでしたら、この２つ目の議題、「英語・外国語教育について」につきましては、皆さんから様々な御意見をいただきました。先ほど来申し上げましたように、私が思っていることを皆さんが先んじて提起していただけたことが大変私にしてはうれしく、そして心強く思いました。しっかり、伴っていければと思っております。

　それでは、意見の整理については、１点目の教育大綱につきましては、おおむね了としていただいたということで、今後こちらで引き続き進めさせていただきたいと思います。

　２点目については、まだこれは１年目、それから中学校は来年からというようなものでございます。今日のことを踏まえてですね、現場でしっかりと回していただきながら、そしてまた、しかるべきときに課題、現状などを皆さんとまたお話させていただければと思います。

以上で、本日予定した議事は終わりました。最後に、教育長から一言御挨拶をお願いしたいと思います。

○重松教育長　　はい、本当にいろんな意味で議論していただきましてありがとうございます。

先生も一緒に頑張って勉強しながら英語を習得してくというか、やり方を習得する、これは大事なことだなと思ってます。今、それでなくても生涯学習でずっと回り続けるということで言われてますので、これが一つのきっかけになればなと。そういう意味では本当にこの英語・外国語を生徒と共に学んでいく、先生も英語が上手にしゃべれるようになるというのは大事なことだなというふうに一つ感じました。

それからもう一つは、先ほど言ったように外国語のときに、このマスクが非常に分かりにくい。それがやっぱり顕著なのは、保育所で３歳までの子供のときに保育士がマスクをして子供に接したら、子供は全然やっぱりだめなんですね。目だけ見てるのではだめなんで。これは、そのまんま英語のところにも当てはまるのかなと。ですから、結局今いろんなことが話されたことが、やはり教育全般につながっていってるんだなということを感じましたので、これから、この外国語ということはないのですけれども、教育の進めることによっては、いろんな部分でこういうことを参考にしながらやっていきたいと思います。

本当にありがとうございました。

○石井市長　　それでは、以上をもちまして本日の総合教育会議を閉めたいと思います。どうもありがとうございました。

閉会　午後３時２３分